

## 煩悶の時代

丘 浅次郎

### 一

「儘ままにならぬが浮世」とは昔から常に云い来まつた言葉であるが、儘ままにならねば、其所そこに必ず煩悶がある。されば煩悶の全く無いと云う世の中は、未だ嘗かつて無かつたであろう。併しかしながら同じく煩悶と云うても、其中には種々様々のものがあつて、子供の煩悶と大人の煩悶、野蠻人の煩悶と文明人の煩悶、昔の人の煩悶と今の人の煩悶と云う様に、互いに比較して見ると、其の間に著いちじるしい相違を認める。また、個人個人によつて異なる煩悶もあれば、多数の人に共通の煩悶もあり、或る時期、或る境遇に特殊な煩悶もあれば、何人も早晩出遇わねばならぬ煩悶もあろう。随つて、煩悶を除くべき方便も様々で、容易たやすく除くことの出来る場合もあれば、其の頗すこぶる困難な場合もあり、中には到底除くことは六むっかしかろうと思われる場合もあるであろう。一人一人に違ちがう様な煩悶は、子供にも大人にも、野蠻人にも文明人にも、昔の人にも今の人にも、嘗かつて絶えたことは無い。例えば、棚の上の菓子に手の届かぬ子供の煩悶とか、意中の娘との恋が成就せぬ青年の煩悶とか、教授が頑健であるために何時いつまでも位地の上がらぬ助教の煩悶とか云う如きものは、何時いつの世にも必ず有る。実は、此の種類の煩悶は、人間に限わつた訳ではなく、他の動物にも常に見られる。鎖の短いた

めに人參を取り得ない猿の煩悶、鉄柵に隔てられて隣りの牝鹿に達し得ない牡鹿の煩悶、先着者のために皮の薄い場所を占領せられて、止むを得ず皮の厚い所で我慢するダニの煩悶などは性質に於て全く之に異ならぬ。斯様な煩悶は、一つ一つに対する解決の方法がある故、之を除くことは不可能ではない。即ち子供には菓子を与え、青年には娘との同棲を許し、助教には位地を上げて遣りさえすれば、其の煩悶だけは兎に角無くすることが出来る。尤も慾には限りの無いもの故、一つの煩悶が片付けば、次の煩悶が現れて、煩悶その物が全く無くなることは望まれぬが、一つ一つの煩悶は何とか方法を講じさえすれば、解決せらるべき性質のものである。我らが今より論じようと思うのは斯様な種類の煩悶ではなく、子供や、野蛮人や、昔の人などの全く知らずに済んだ、文明的現代的の煩悶についてである。

## 二

我らは今より丁度十年前（一九〇一年）の本誌（『中央公論』）の新年号に「人類の将来」と題する一篇を載せて、人類の今まで経過し来った道筋は初めは上り坂であったが、後には下り坂と成った。即ち人類は今日下り坂の途中にあるとの考えを公にした。この説は、其の後著した「人類の過去現在及び未来」の中にも「生物学講話」の中にも簡単ながら書き加えて置いたが、今より述べんとする所も、之を基礎としたもの故、一応その要点だけを次に掲げる。

人間も原始時代には猿と同様に小さな団体を造って生活して居たもので、其の頃には小さな団体同志で激しく相争い、負けた団体は亡び失せ、勝った団体のみが生き残り、長い間、斯かる生活を続けて居る間には、自然淘汰の結果として、団体生活に適する性質が次第に発達し来った。団体生活に適する性質として最も大

切なのは、生まれながらに互に協力一致せずには居られぬと云う性質である。而して人類や猿の如き階級型の団体を造る動物では、団体内の協力一致が充分に行われる為には、誰もが上の者に絶対に服従すると云うことが最も有効である故、団体間に生存競争の続く間は、服従性は追々完全に発達して来た。然るに人類は他の動物と違い、何をすることも道具を用いる故、団体と団体との競争にも、道具の進歩したもののほうが勝つ見込みが多い訳で、其ため道具は時と共に段々精巧になったが、道具が精巧になれば、それに伴うて、団体は次第に大きく成らざるを得なかつた。何故と云うに団体は大きなほど強い筈ではあるが、道具が幼稚な間は一定の限界を超えると、全部の統一が保たれず却つて不利益が生ずる。今日でも野蛮人は皆、小さな蕃社に分かれて居て、国と名づくべき程の大きな団体を造り得ないのは其ためである。之に反して、道具が精巧になれば、命令を伝えるにも、兵糧を運ぶにも少しも困難を感じぬ故、団体は何所まで大きく成つても差支えは起らぬのみか、大きく成つただけ有力となる。所が団体が段々大きくなると、団体間の競争の勝負が容易に片付かず、且、たとえ、一方が敗れたとしても、団体中の者が悉く殺される訳では無く、僅かに一小部分の者が死ぬだけで、残りは相変らず生存し繁殖する故、団体を単位とした自然淘汰は全く行われぬことになる。而して自然淘汰が止めば其の時まで自然淘汰の働きによつて養成せられ、または維持せられ来た性質は退化し始めるを免れぬ。前にも述べた通り、人類の団体生活に必要な性質として自然淘汰によつて養成せられ来たのは、協力一致の実を挙げるための服従性であつたが、自然淘汰が止んだ上は、此の性質は退化するの外はなく、服従性が退化すれば、階級型の団体は到底協力一致の実を挙げることは出来ぬ。元來が団体生活を営む動物でありながら、団体生活に必要な性質が少しずつ減じて行くとすれば、之は已に運命の下り坂に向かうたものと見做すの外はない。我々が、人類は今日、已に下り坂の途中にありと云うのは即

ち此の意味に於てである。而して、或る程度まで文明が進めば誰にも必ず文明に伴う一種の煩悶の起ることは、此の説によつてのみ理由を了解することが出来る様に思われる。

### 三

以上述べた如く、人間の過去には上り坂の時代と下り坂の時代とがあり、上り坂の時代には自然淘汰の働きによつて、団体生活に適する性質が次第に発達し、下り坂の時代には、自然淘汰が止んだために、斯かる性質が段々退化したものとすれば、今日の人類社会に何れの方面にも限りなく矛盾の存することが容易に理解せられる。上り坂の頃には、協力一致の方便としての服従性が、盛に養成せられた故、それに基づいた風俗習慣が出来上つたが、下り坂に成つてからは、この性質が少しずつ退化したために、其の反対の性質が何時となく発生し、それを基礎とした新思想が段々と現れてきた。服従性の反対の性質とは、自由平等を求める性質であるが、服従性が減じたと云うのと、自由平等を求める性質が現れたと云うのとは、実は同一の事を別の言葉で云うて居るに過ぎぬ。恰も白が勝ち相になつたと云うても、黒が負け相に成つたと云うても、事実に変りが無い様なものである。さて、如何なる性質でも自然淘汰の働きが止んだからと云うて、全部邊に消え失せるものではなく、其の後も随分長い間、継続することは、尾の骨や、耳を動かす筋肉が今日の人間にも尚存するのを見ても明かであるが、上り坂時代に発達した、階級型の団体に固有な絶対服従の性質は、下り坂に成つてからも、依然として継続し、団体が大きく成ると共に、階級の数も追々増して、一時は疑然たる階級制度の形を現した。今日も尚その引き続きとして、社会は大体昔のままの階級制度が行われて居る。

社会が最上から最下まで幾段かの階級に分たれ、各階級ともに、上の者には絶対に服従し、下の者には無

限に威張るのが、階級制度の特徴であるが、斯様な世の中に住んで居ても、昔ながらの服従性を尚多量に所持して居る人ならば、少しも煩悶が起らぬ。服従性を備えた人が階級制度の世の中に住んで居るのは、恰も魚が水の中に住んで居ると同じ訳である故、上の者には恭しく頭を下げ、下の者には恭しく頭を下げさせて、之を当然の人間生活であると思つて居る。上の者から貰つた物は宝物として大切に保存し、上の者に贈つた物が受納せられれば、之を非常な名譽と思ひ、上の者の前で画でも書けば、之を無上の光榮と心得、上の者から一言ものを云われただけでも有難くて堪らぬ様な人間は皆この仲間仲間に属する。若しも世の中の人間が、悉く斯様な人のみであつたならば、他の動物の如き個人的煩悶は有るとしても、それ以外の煩悶は起らずに済んだであらう。

所が、人類の径路が下り坂となつてからは、服従性が次第に減少し、其ため物の考え方が大に改まつて来た。尤も總べての人が同じ歩調で変化する訳ではなく、早く変わる人もあれば、晩く変わる人もあり、死ぬまで変らぬ人もある故、今日の所では已に變つた新しい人と、未だ変らぬ旧い人とが軒を並べて生活している有様である。旧い人は前に述べた通り、今日の階級制度に対して別に煩悶も起さぬが、新しい人の方は、心の中に信ずることと、目の前の社会の制度とが餘り甚だしく違ふ故、到底煩悶せずには居られぬ。服従性の退化した人から見れば、今日の社会は実に理屈の合はぬことだらけで、先ず第一に同じ人間に人為的の階級を附けて區別することが、不条理千万と思われる。裸にして見れば、彼と我との間に何の別も無いのに、彼は社会の上流に立つて衆人に尊敬せられ、我は遙に其の下に置かれて、世の輕蔑を受けるのは何故であるか、彼は懶けながら贅沢の限りを盡し、我は日夜働き続けて、而も貧乏に苦しむのは何故であるか。何故嘗て一回も我を助けたることなき彼に敬意を表せねばならぬか。何故我よりも知恵が優れたりと思われぬ彼の命令に従

わねばならぬか。其の他此は何故か、彼は何故かと不審を起して見ると、一つとして正当と思われるものは無い。物の考え方が、此の程度まで進んだ後に、自分の過去を振り返って見れば、よくも今まで此様な不条理極まる世の中に平気で生活し来つたことよと驚かずには居られぬ。また自分の周囲の人々が平気で居るのを見れば、其の無感覚の状態が恰も眠れる有様に異ならぬ故、自分等だけが他よりも先に目覚めたものと思へざるを得ない。覚醒とは即ち此事である。而して一旦覚醒した以上は、服従性の上に築き上げた旧来の階級制度に自分を嵌めることが非常の苦痛であるが、世の中は一朝一夕に改まるものでない故、山に隠れるか、自殺するかせぬ限りは、苦痛を忍んで、有り合せの世の中に自身を嵌めるの外に致し方はない。現代の社会は大体が昔の階級制度のまま、風俗でも習慣でも、皆階級制度を基礎としたもの故、覚めた人が心の中に信じて居ることとは到底一致しない。されば、今日の文明国に於て、覚めた人々が止むを得ず古い習慣に従うて働作して居る様子は丸で、曲馬(カス)の道化役者が見物人の機嫌を取り結ぶために、心にも無い滑稽を演じて居るのと同じく、実に憫然の至りである。如何に渡世のためとは云いながら、よくも此様な馬鹿げた事が臆面もなく出来たものであると考へては、自身で自身を軽蔑せずには居られぬが、自身を軽蔑せざる可からざるに至つては、煩悶も随分甚だしからざるを得ない。昔から娼妓の職業を苦界と名づけ来つたが、己の欲せぬことを我慢して務めながら、恰も喜んで務めて居る如くに装わねばならぬ苦しみから云えば、今日の覚めたる文明人の生活は、確に一種の苦界なりと云うことが出来よう。

服従性が退歩して、自由平等を求め様になるには、知識の程度が大いに關係する。之は歴史を見ても明なことで、最も早く自由平等の叫び声を聞いたのは、最も早く文明の開けた国々である。また同じ時代に住む人間では、知識の低い者は容易に覚めるには至らず、書物でも読む様な階級の者だけが先ず覚める。され

ば、此所に述べた如き煩悶は、子供にも無く、野蛮人にも無く、ただ或る程度まで知識の進んだ者のみの有する煩悶であるが、今後は教育は益々普及し、知識は益々進むであろうから、覚めた人の数はただ増すばかりで、早晚文明人が悉く此の煩悶に堪え兼ねる時代が来るであろう。

#### 四

以上は文明の進むに随い、各個人に激しき煩悶の起ることの避けられぬ次第を述べたのであるが、煩悶は個人にのみ起る訳ではない。世の文明が進めば、民族としての煩悶も生ずる。先ず如何なる民族には、民族としての煩悶が無いかと云うに、之は自己の民族を以つて、一番優れたものと思つて居る民族である。地球上に住む民族の数は多いが、我が民族に優る民族は他に決して無いと思つて居る間は、心の中は泰平であつて、民族としての煩悶は有り得ない。然らば、斯かる民族は何所に有るか云うに、隣りの民族との競争に負けるまでは、何れの民族でも斯様に考へて居る。また少し位、負けても、回復の望みが絶無でない以上は、斯様な考へを容易に捨てぬ。大概の野蛮民族は皆、斯く信じて居た。今日と雖も、斯く信じて居る者が甚だ多い。而して何れの民族にも、自己の民族が他よりも優れて居ることの証拠となるべき口碑や伝説が有つて、代々之を語り伝えて、自己の民族が世界に最も優れたるものなりと確信している。

斯様な時代が何時までも続けば誠に結構であるが、文明の進歩は到底之を許さぬ。未だ世の中の開けぬ頃には交通の便が缺けて居るために、同じ地球の表面に住んで居ても、稍遠い所にいる他の民族とは接触する機会が全く無い。此所より五千里隔つた所には足の長い人種が居るとか、一万里隔つた所には胸に孔のある人種が居るとか様々の噂を聞くだけで、実物を見ることは一度も無い故、仮に自分より遙に優つた民族が他

に有つても、彼と我とを並べて比較して見る事が出来ぬために、我の劣つて居ることに少しも心附かずに居られた。然るに、文明が進んで交通の機関が急激に発達し、汽車や汽船が盛に往復する様になれば、如何に世界の片隅に引込んで居た民族でも、他と接触することを避ける訳には行かぬ。ヴェルヌが『八十日間世界一周』を書いた頃には、二ヶ月と二十日も掛かつて地球を一周することが架空の小説と思われていたが、其の後、鉄道が延び、汽船が大きく成つたために、今日では誰にも出来る尋常のことと成つた。飛行機を用いれば其の三分の一の日数でも容易に世界を一周することが出来よう。斯くの如く、交通の機関が発達すれば、それだけ地球が小さく成つたも同様で、何れの民族も互に相接触せざるを得ぬこととなるが、異民族の接触する所には其所に競争が起らざるを得ない。彼の欲する物を我が有するか我の欲する物を彼が有するか、彼と我とが第三者の有する同一の物を欲するかの場合には到底衝突を免れぬが、衝突すれば力の優つた民族が勝ち、力の劣つた民族が敗けるの外はない。自分よりも優つた民族からの圧迫を受け、自分の意志を曲げて相手の主張に服従することを餘儀なくせられるときに、民族としての煩悶が生ずる。彼が勝ち、我が敗けたと云う目前の事実を見ては、誰の胸にも、我は今まで信じて居た如くに、世界第一の民族では無いのではなからうかとの疑いが起らざるを得ず、一旦この疑いが起れば、最早昔の如くに枕を高うしては眠られぬ。而して斯かることが度重なれば、其度ごとに煩悶の度が高まり行くべきは勿論である。

文明の進むに伴い、民族としての煩悶の起るべき尚、一つの原因は服従性の退化である。何れの民族でも団体内のよく治まつて居ることを第一の誇りとして居るが、世が開けるに随うて、此事が次第に六かしく成つて来る。如何なる民族でも理解力が増すと同時に服従性の退化するを免れぬが、服従性が退化すれば、旧来の階級制度を面白く思はず、上に位する者に敬意を表する事を肯ぜぬ様な人間が続々と出て居る。我が民族



を世界第一なりと思う考えの中には、階級制度の完全に行われて居ると云うことも、其の一ヶ条として含まれて居た故、この事が少しづつ崩れ行く形跡が見えては、今までの誇りの一部が傷けられたことに当り、今後如何に成り行くかとの心配が生ずる。階級制度のよく行われるのは素より服従性の旺盛なるによる故、世の治まれることを誇るのは、即ち服従性の未だ退化せぬを自慢して居たに外ならぬが、文明が進めば、服従性の退化は到底防ぐことが出来ず、早晚この方面にも民族としての煩悶の生ずる時代が来るのを免れぬ。

## 五

四、五年前の新聞に出て居たことであるが、二十六歳になる盲の女が手術を受けて、初めて目が見える様になったときの感想に、今までは世間を遙に奇麗なものと想像して居た。目を開いて見て、其の意外に汚ないのに驚いたと書いてあった。また或る脚本に、盲目の夫婦が、兩人ともに目の見えぬことを非常に歎き、観音様に願を掛けて、一心不乱に祈つた所が、靈験によつて、兩人ともに同時に目が見える様に成つた。併し互いに顔を見合すと、今まで心の中に想像して居た様な美男美女ではなくて、頗る醜い顔であつたので、之ならば元の盲で居た方が幾らましか分からぬと云うて、却つて観音を怨む所が作つてあつた。總べて美しいと想像して居たものの実物が醜いことを見出したときには、誰も失望して不愉快を感じずるが、それが、自己の属する民族である場合には、深く煩悶せずには居られぬ。文明が進むに随うて、各個人に煩悶の起るのは、無感覚から有感覚に移つたのである故、之は熟睡から目醒めたのに比較することが出来るが、世が開け行くために各民族に煩悶の起るのは、幻覚から目の覚めた状態に移るのである故、恰も楽しい夢を破られたに均しい。而して楽しい夢を破るものは、先ず第一には他民族からの圧迫である。

今まで我が民族は世界無類の優等民族なりと自負して居た所へ、遽に他の民族が押し寄せて来て、種々のことを要求する。或は港を開けとか、居留地を定めよとか、鉄道を掛けさせよとか、鉱山の発掘を許せとか云うて来る。先方に云わせれば一々尤もの理由があるが、当方から見れば何れも無理難題である。之を承諾すれば、先祖代々我が民族のみで占領し来った国内に他民族の勢力が入り込んで来る。而も、之を拒絶するには、武力に訴えるの外に途は無い。敵を知らず、己を知らず兵力を用いば、忽ち打ち敗られて、前に幾倍する苛酷な要求を承知することを強いられる。斯かることが二、三回も重なれば、如何に自負心の強かつた民族でも、我が民族が世界一なりと信じ続けることは出来ず、楽しかった夢から揺り起されて、我が民族は相手の民族よりも劣ると云う醜い現実を認めねばならぬことに成る。人間にも少々位い揺り動かしても夢の覚めぬ者がある通り、民族にも、何回も揺られながら泰然として眠り続けて居るものが無いでもないが、目の前の事実は何よりも雄辯である故、数回、我が無力なることが示されれば、大概のものは昔の夢から覚めて、それと同時に民族としての煩悶を始める。

文明が進めば、服従性が退化するために、伝来の階級制度が少しずつ乱れて行くことも、或る民族をして煩悶せしめる。上に位する者に対して、敬意を表せぬ者や、敵意を含む者が少しずつ現れ始めても、最初の中は之を全くの例外と見做し、再び有るまじき事として心を安んじて居るが、同様なことが三度四度と重なる時、徐々に心配に成つて来る。他の民族は兎も角、我が民族に限つては、斯かることは未来永劫決して有るまじと思つて云た不祥事が屢々起るのを見ては、若しや之は例外ではなくて、当然斯くあるべき時代が到着したのではないかとの疑いが生じ、次には疑いが固まつて、愈々それに違いないと考えるに至る。トルストイの「クレイツェロヴァ・ソナタ」の中にある男が、結婚後間もなく夫婦喧嘩をした頃には、一度一度の喧

嘩を過ちのために生じた偶発事件で、注意さえすれば、再び起るのを避けることを得るものと思うたが、今から考えれば、それは全く誤りであつて、実は喧嘩は当然喧嘩の起るべき深い理由のために起つたのであつたと云うた如くに、階級制度に反する様な事を敢えてする人間の出るのも、最初こそ偶然的に見えるが、更に深く其の奥を探れば、当然斯かる者が出ねばならぬ時代に達したのである。斯く気が附いて見ると、今まで我が民族ばかりは別であると思ひ込んで居たのは夢であつたと知れて、其所に煩悶が始まる。前にも述べた通り、長らく楽しんで居た美しい夢から揺り起され、醜い我身を見せ附けられては、誰も煩悶を禁じ得ないであろうが、民族としては、今まで世界第一と思つていた夢を破られて、我の劣つて居る現実を明に認めねばならぬ時や、我が民族ばかりは大丈夫と思つてた夢から起されて、頗る不用心なることを目の前に見た時などに、最も大なる煩悶が起るであろう。而して、此の二つは、大概の民族が野蛮から文明に進み行く途中に必ず通過せねばならぬ関所である。

## 六

以上は文明の進むに随つて、当然生ずべき個人の煩悶と民族の煩悶とに就いて簡単に述べたのであるが、次に人類としての煩悶なるものが有るや否やと云うに、之は今日の所では、未だ何所にも無い様に見受ける。煩悶は美しい夢から覚めて、醜い現実を見たときに起ると云うたが、今日の人類は未だ美しい夢を見て居る最中である故、人類としての煩悶を全く知らずに居る。人は万物の靈なりと昔から云い來つたが、斯く信じて居る間は、人類としての煩悶は決して起らぬ。神は天地万物を造つた後に、自分の姿に似せて人を造つた（『創世記』一—十六。そこで神が言われた。われわれは人を吾々の像の通り、われわれに似る様に造らう。）。それ故、人は總ての物の上に位すると思つて居れば、人類とし

ては心中、大に安んじて居られる故、何も態々煩悶するに及ばぬ。生物は下等のものから、次第に高等のものに進化し来つたが、人類は其の最も高等なもので、今後は更に一層高等のものに成るべき筈であると考え居る人も、略々之と同様の状態にある。斯くの如く、考えの形は人々によつて様々に違つても、人を万物の霊と見做す点に於て悉く一致して居るが、我らから見れば、之は何れも美しい夢に過ぎぬ。

人類をして、斯様な美しい夢を見させて置く事情は沢山にある。先ず第一には今日人類を相手として対等の競争をなし得る動物が一種も無い。之が人類をして極度に自惚れしめた最大の原因であるは云うに及ばぬ。人類は牙も短かく、爪も鈍く、到底他の猛獸と戦うに適應せぬ身体を持つて居ながら、總べての動物に打ち勝つたのは、全く優れた知恵の働きによつて牙や爪よりも、更に有力な武器を造り用いたからであつた。されば知恵に於ては人類は遙に段を隔てて他の動物の上に位する。此の点では、人は万物の霊と称して少しも無理はない。而して、昔の人に比すれば、今のの方が知恵が優り、野蛮人に比すれば文明人のほうが知恵が優り、其の文明人の知恵が日々増して行く所を見ては、人類が今日盛んに上に向うて進みつつある如くに思うのも決して無理ではない。

人類が知恵の力によつて造るものは道具である故、知恵の進歩は道具の進歩によつて直接に示される。昔の道具に比して今日の道具の優つて居るは云うまでもないが、特に著しく其の進歩したのは最近百年ばかりの間である。今日文明の利器と称して、人類の最も誇りとするものは、何れも其の間に發明せられた。而も、それが絶えず改良せられ、昨日の新式も今日は已に旧式として捨てられる。飛行機、潜航艇、無線電信、無線電話など昔の人の夢にも知らなかつた精巧な器械が造られ、蒸汽機関の如きは、今日では最早前世紀の遺物であるかの如くに感ぜられる。外国の新聞雑誌には新發明、新発見が、毎日の様に発表せられ、各方面と

も少しでも油断すれば忽ち時勢に後れて仕舞う。実に今日ほど速に文明の進歩する時代は嘗て無かつた所で、此の勢で進んだならば、終に何所まで達するやら、到底想像も出来ぬような有様である。

なお人類の自尊心を唆るのは、自然の征服と云う言葉である。之はただ道具の進歩を別の言葉で言い現わしたに過ぎぬが、此の言葉を聞いただけでも、人類は今日慥に急勾配の上り坂を勢いよく駆け登りつつありとの確信が起る。灯を点じて夜を明るくし、薪を焚いて冬を温くしたのを手始めとして、堤を築いて洪水を防ぎ、池を乾して田を造り、鉄砲を以て猛獣を退治し、薬品を以て黴菌を駆逐した。汽車、自動車、タンク等によつて陸を征服し、汽船や潜航艇によつて海を征服し、飛行機、飛行船によつて空を征服した。夜は水を使役して灯をつけさせ、夏は石炭を使役して氷を造らせる。天地万物一として人類に征服せられぬものは無く、且日々征服の範囲が広まつて行く。此の有様を目前に見て居るのである故、人類は今日盛に進歩しつつありと誰もが考えるのは、素より当然のことである。

以上の如き物質的方面に關することの外に、精神的方面に於ても人類は今進歩しつつありとの考えを起さしめる事情がある。それは文明の進むに随うて個人が追々覚醒したことである。自由平等を求める事を知らず、階級制度に盲従して居た頃の精神状態を振り返つて見ると、覚めて後の精神状態は慥に一段上に進み来つたと考えざるを得ぬ故、誰も人類は精神的にも、進歩の最中であると信じて居る。解放せよとか、人格を認めよとか云うのは即ち進歩の徴である如くに思われる。其の他哲学とか宗教とか云う方面の学問が盛んに行われ、其の研究の結果として新しい学説が続々と発表せられることなども、大にこの觀念を固くするに与つた要するに今日は人類は今盛んに上に向うて進みつつありと誰もが信じて居る時代である。

我らの考えは前にも述べた通り、少しく之と違ふ。我らの説によれば、人類は小さな団体を造つて、互い

に激しく競争して居た頃までは上り坂にあつたが、其の後、知恵が増し道具が精巧に成つたために、団体が過度に大きく成つてからは、次第に下り坂に移つた。上り坂とは、生まれながらに協力一致をせずに居られぬと云う団体生活に必要な性質が段々発達し來つた時代を云い、下り坂とは、此の性質が追々退化し來つた時代を云う。凡そ如何なる生物でも、其の生活に適する性質が進歩する時代が其の種族の運命の上り坂であり、斯かる性質が退化し始めれば、之は其の種族の運命が已に下り坂に向うたものと見做すの外は無からうが、此事を人類に当て嵌めて考えて見ると、元來団体動物として発達し來つたものに、団体生活に必要な協力が一致の性質が少しずつ減じ行くとすれば、之は当然、已に運命の下り坂にあるものと認めねばならぬ。如何に器械が精巧になり、交通が開け、教育が進歩し、思想が発達しても、団体動物の一なる人類は、目下自然淘汰の中絶のために、団体生活に必要な性質を漸々失いつつありと云う生物学上の断案は決して、それによつて、動かさる可きものでない。此の考えの上に立つて今日の社会を見渡すと、個人としてさえ未だ目の覚めぬ旧思想の人等は云うに及ばず、自由平等を求めて解放を叫ぶ新しい人等も、実は個人として目が覚めたと云うだけで、人類としては未だ楽しい夢を見て居る最中である。

然らば今日の世界の中には、人類としての夢を覚めさせるべき事情が全く無いかと云うに、之は気が附いて見れば、已に無数に有る。労働問題とか、生活問題とか社会問題とか政治問題とか、總べて問題と名の附くものは皆、睡れる人類を揺り動かして居るのである。昔は無くて済んだ問題が今は無数に現われ、而も何れの問題も時と共に益々複雑になつて、何時片付くことや少しも見込みが立たぬ。此等の問題は皆声を励まして、「オイ人間、貴様は之でもまだ、自分は万物の靈で、急速力を以て天に昇りつつありとの夢から目覚めぬのか」と怒鳴りながら頻りに人類を揺り動かして居るのである。斯く揺られながら一向平気で夢を見続けて

居る人間は、実に呆れ果てた寢坊と云わねばならぬ。

## 七

古本の目録で「總べての鍵」(Clavis universalis)と云う表題を見たことがあるが、人類は今日已に下り坂にありと云う事を承認するのは、總べての問題に対する鍵を得たことに当たる。但し一々の問題を解決し去るための鍵ではなく、何れの問題も容易に解決の出来るものでないと云う理由を知るための鍵である。今日続出する種々の問題は、其の眞の源まで溯れば、必ず人類に協力一致の性質が退化したために起つたもので、例外と見做すべきものは一つも無い。協力一致の性質が盛である間は、同一団体の内で争いの起ることは絶無であるが、此の性質が退化すると、同じ団体の内でも、利害の關係を異にする部分の間には鬭争が始まる。今日何問題、何問題と云うて世人の喧しく論ずるものは、悉く同一団体内の部分間の衝突に基づいて居る。されば、人類の協力一致の性質が退化すべき原因が依然として存し、此の性質は今後も益々退化し行くものとすれば、何れの問題も容易に解決せらるべき望みは無い。今後は恐らく、旧問題が未決のままである所へ、新問題が続々と現われ、一つとして完全な解決の道の無いのに苦しむであろう。Influenzaは一昨年来全世界の人々を悩ました(一九一八年から一九一九年にかけて大流行したスペイン風邪)が、将来の人類を大に悩ますものはInsolvenza(イタリア語で「全世界で六億人がかかり、二三〇〇万人が死亡」)が、(支払不能の意)であろうと推察する。斯くて種々の厄介な問題が続出し、日々の生活にも不安を感じる様になれば、如何に寢坊の人間でも楽しい夢を見て居る訳には行かず、止むを得ず目を覚ますであろうが、其時から人類としての煩悶の時代が始まる。

人間の経路が已に下り坂であることに心附いた者が今までに一人も無かつた次第ではない。昔から末世と

か澆季ぎょうき（道德が衰え人情の希薄）とか云う言葉を常に用い來つたが、末世まっせも澆季ぎょうきも過去の徑路に比して、其時が一番下に降つて居るとの意味である。而して、二千年前も千年前も百年前も今日も、何時いつも其の當時が澆季ぎょうきであるとすれば、道は何所どこまでも下り坂であつたに違ひない。然るに、口には常に澆季ぎょうきとか末世まっせとか云いながら人類が今日真に下り坂にあると思わなかつたのは何故かと云うに、之は人類が下り坂に在らねばならぬ眞の理由を知らなかつた為に、ただ何等かの過失に基づくと考へて居たからである。過失に基づくと、其の場限りの現象と見做みなす以上は、其の過失さえ除けば、之を常態に回復することが出来る理屈になるが、此事を企てたのが、即ち宗教である。何れの宗教でも世を救う事を目的とせぬものは無いが、人類が上り坂に在る間は、何も之を救う必要は無い。下り坂で何所どこまで落ちるやら知れぬ故、之を見兼ねて、救うて遣らうとの大慈悲心を起す者が出たのである。されば昔から宗教があつたと云うことは、人類は更にそれよりも遙に昔から已すでに下り坂に在つたことの証拠と見做みなすことが出来よう。

さて人類の生まれながらに有する協力一致の性質が次第に退化し行くとすれば、今後は協力一致を要する様な仕事は段々行われ難くなるものと覺悟せねばならぬ。協力一致には先ず私慾を捨てて掛かることが必要であるが、私慾は今日の世の中では個人を単位とした自然淘汰によつて益々發達するであろうから、之を捨てさせることは素もとより無理な註文である。個人が私慾を捨てず、随つて団体は協力一致することが出来ぬとすれば、何れの問題でも解決は頗すこる六むつかしかからざるを得ない。個人としては目覚めざめても、人類としては未だ夢を見て居る人々の中には、多くの理想家があつて、斯かくすれば世の中が善くなる、斯かく改めれば理想の世界が來ると、心中にも考へ、発表もしたが、何時いつも人類の協力一致の性質が退化して行くことに心附かぬために、折角せつかくの考案も夢以上のものとは成らぬ。新しい人だけが寄つて、他の人の居ない所に新しい村を造り、



自分等の理想通りの生活をしようと試みた例はアメリカあたりに幾らも有つたが、以上の理由によつて悉く失敗に終つた。珍らしい間こそ無事に面白く暮らせるが、本来の性質を長く矯めることは不可能である故、その中には思い設けぬ衝突などが始まり、終には止むを得ず離散して、元の出来合いの世の中に戻らねばならぬことに成つた。同志の者だけが寄つてさえ、其の通りであるから、誰も彼もが雑居して居る広い世の中を理想通りに改良することは到底望まれぬ。近頃喧しい労働問題の如きも、ゾラの「トラヴァイユ」に書いてある様に、資本と智識と労働とが、よく調和して、全市が愉快に榮えれば、何より結構であるが、斯様なことは小説の外には見られぬ。我らは嘗て、此の本を読んだときに、若しも自分がゾラだけの筆を持つて居たならば、前半だけは其のままとし、後半には誰が悪意を有するのでもなく、誰が失策を演ずるのでもなく、全く人間本来の性質のために、「クレシユリー」工場に大悶着の起る有様を最も自然的に画いて見たいと思つた。或る問題が起れば、それを解決するために、多数の人が集まつて会議を開くが、斯様な会議で如何なることを議決しようとも、それが人間の性質として出来ぬことならば、結局何の役にも立たぬ。恰も蟹が寄つて、満場一致で縦に匍うことを議決しても、何にも成らぬのと同じである。而して、如何なることが、人間の性質として出来ぬかと云うと、私慾を捨てて協力一致することであるが、此事が行われねば、殆ど總ての問題は無解決に終わる。一時の弥縫策は或は出来るとしても、根本からの解決は到底出来ぬであらう。斯くして無解決の問題が殖えれば殖えるだけ、人類としての煩悶は増進せざるを得ない。已に前にも云うた通り、今日は個人としては大いに目覚めた人は有つても、人類としては未だ夢を見て居る最中である故、人類としての煩悶は無いが、其中には楽しい夢が覚めて醜い現実を認めねばならぬ時が来るに違いない。それが人類としての煩悶の始まる時であつて、其の後は現実の曝露する毎に煩悶の量は増すばかりであらう。

## 八

最後に誤解を避けるために一言して置きたいのは、以上は、人類の過去及び未来を第三者として側面から冷静に観察した結論に過ぎぬとのことである。斯く成ればよいとか、斯く成つては困るとか云う如き、自分の希望や憂慮は一言も云うたのではない。例えば文明が進めば器械が精巧になり、団体が大きく成つて、其のために、人類の協力一致の性質が退歩したと云うても、決して文明を呪い野蛮に帰れと主張する訳では無い。今日の世の中で文明に進むことを躊躇すれば、忽ち他の民族の圧迫を受けて苦しまねばならぬ故、否でも応でも文明は出来るだけ進めねばならぬ。また自由平等を標準として世の中を改造しても、中々理想の世界には成らぬと云うても、決して自由や平等が無用であると説く訳では無い。自由平等を求めるとは人類の進むべき唯一の道筋であつて、之を避けては先へ行くことは出来ぬ。如何に改造しても中々理想通りには成らぬと云うたが、之も決して改造を不必要と考へたからではない。現状のまま長く続いては、大多数の者は到底我慢が出来ぬ故、之を打破することは無論必要である。人類は下り坂に成つてから服従性が退化して、其ために団体の纏まりが悪くなったと説いたが、之も決して、服従性を復古せしめたいと云う議論では無い。ただ事實は斯くの如くであると云うたに過ぎぬ。要するに我らの述べた所は、人類生活の舞台を棧敷から見物して居る心持ちで観察し得た所を有りのままに書き連ねたまでである。

人類の生まれながらに有する協力一致の性質は追々退化するを免れぬが、其のため却つて協力一致の範囲が広がったかの如き外観を呈する場合がある。之は一寸不思議に聞えるが、実は何でも無い。凡そ聯合とか同盟とか云うことは、共同の敵を目の前に控えた時には誰と誰との間にも容易く行われる。異越同舟とは即

ち斯かる場合を云うのである。協力一致の性質が退化すれば、団体は利害の相反する若干の部分に分かれざるを得ぬが、これらが相戦うに当つては、他の団体に属する同じ境遇の者の助けを借りるのが得策である。例えば甲民族の労働者が資本家と相戦う際には、乙民族、丙民族などの労働者と聯合するのが最も有効な方法に違いない。斯くなれば資本家は、また資本家として、異民族の間に連絡を保つ方法を講ぜねばならぬ。他の方面に於ても、總て之と同様で、共同の敵に対して自分等の利益を護るためには、種々の聯合が出来るであらう。而して、交通が楽になり、世界が狭くなつただけ、斯様な聯合も多くは世界的のものとなるが、之だけを見ると、人類は今後益々広く協力一致し得るものの如くに思われ、今までの文明は競争の文明であつたが、将来の文明は聯合の文明であると論ずる人までが出来る。併し、聯合は何時も共同の敵に対してのみ造られるもの故、実は競争に勝つ事を目的とする一方便に過ぎぬ。

人類が今、下りつつある坂路は、左は絶壁で攀じ登ることは出来ず、右は断岸で落ちれば助かる見込みは無い。其所を多くの異なつた民族が押し合いながら下りて行くのであるから、餘程用心せぬと險呑である。幾多の民族は今までの途中に谷に押し落とされて、已に絶滅した。將に押し落されんとして居る民族は今日幾つもある。文明とは、他の民族を押し落すように、我が民族は押し落とされぬ様にと、一生懸命に互いに押し合うときに用いる武器の名に過ぎぬ。文明の劣つた民族は続々断岸から突き落とされて亡び失せ、文明の優つた民族は互に押し合いながら坂を下りて行く。人類は天国に昇りつつありと云う楽しい夢から覚めて、ダンテの「インフェルノ(地獄篇)」にも似たる現状に心附いたならば、煩悶の起るは当然であるが、此の人類としての煩悶は、目の覚めて居る間は到底減少する見込みはなく、恐らく次なる絶望の時代まで継続するであらう。

- 『煩悶と自由』（大日本雄辯会、一九二二年二月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2<sub>ε</sub></sub>でタイプセッティングを行い、dvi<sub>2</sub>pdfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。